関西自然保護機構会報 No. 1 (1978年10月)

社寺林の研究にあたって[1)]

菅沼孝之[2)]

Basic studies for conservation of the sacred forests of shrines and temples.

Suganuma, Takayuki

はじめに

わが国で始めて水田が営まれたのは，縄紋時代末期とも，弥生時代に入ってからともいわれているが，いずれにしても，この時代にわれわれの祖先が低平地に住居を築き，生活を始めたと考えて差し支えないであろう。この時代は狩猟生活の時期と違って，生活のために自然に人為が加えられていったが，それは，弥生時代の中期に至って鉄器が普及すると同時に拍車がかかった。人びとは森を開拓して畑を作り，丘をけずって住居を作り，湿地を改良して水田を作り，山からは建築材や薪炭材をとり，また，それらのための道もつけられた。

こうしてお互いに行き来する集落が作られると，そこには必ずといってよいほど，神が祀られた。上代における信仰は，神が天下る聖域を中心とした。その聖域は神南備と称せられ，それは大きな岩であったり，孤立する丘や山であったり，大きな木であったり，また森であった。この時代には祭祀に際して，神は天下ったが，平安のころから現在の神社の形態がとられるようになり，自然物が聖域であるという考え方が変ってくる。しかし，現在でも奈良県桜井市の大神神社の御神体は三輪山であり，このように古代の信仰の姿が伝えられている例もある。

さて，古代の信仰において，神南備には常緑樹の森林があてられた例が多く，時代が下って，神殿が造営されても，森林は大切にされ，とくに，神殿の真裏の部分は玉垣をめぐらせたり，また「入らずの森」と称して人の入林を拒んでいるところがある。こうした神社の森は何時ごろからか，鎮守の森と呼ばれるようになり，地域住民の保護を受けて現在に伝えられている。

わが国における人口の密集地のほとんどは暖温帯の低平地に集中するが，この地域を特徴づける森林は照葉樹林であることを，わずかにもせよ伝えているのは，ほかならぬこの鎮守の森である。

奈良朝に栄えた奈良盆地における水田開発を，八賀(1975)は弥生時代前期に面積比で17%，中期以降で50%，古墳時代をへて7世紀末までにほぼ開発を終了したとしているから，盆地内の鎮守の森は少数の例を除いて，当時すでにその基礎が決っていたと考えてもよいであろう。そうして，森にはほとんど人手が加わらないまま，あるいは自然災害のあとなどに人手が加えられても，比較的放置される状態がつづいて今日に至ったと考えられる。

それは，社叢とか樹叢とかいった小さい単位の天然記念物指定物件のほとんどが鎮守の森で占められていることでもわかる。常緑広葉樹林の鎮守の森のみをとりあげても23件（昭和46年3月現在）あり，さらに指定物件と同等あるいは同等以上の価値のある社叢は全国に指定物件とほぼ同数は存在するものと思う。この指定物件23件中には社叢中の特殊植物の発生地，分布地，群落等は含んでいないので，既に指定されているこうした物件を加えるとさらに増えることはいうまでもない。

このように自然な状態におかれている社叢はもちろんのことであるが，植栽された場合でも，林床は放置されていることが多く，その構成種から前の時期の自然林を推察することができる場合が多い。一般に平坦地でこの傾向がうかがわれ，山村の社叢では手入れが良くゆきとどいて不分明な場合が多い。

社叢はいわば点状の分布ということになるが，等しい立地条件を結びあるいはぬりつぶしていくと面となって広がり，われわれの生活領域の自然植生（原植生），さ

1）関西自然保護機構業績第2号

2）奈良女子大学理学部生物学教室

らには潜在自然植生を知ることができるわけで，環境保全という点からも社叢は重要な役割をもつといえる。

近畿地方の社叢林を対象とした植物学的な研究は数多くあるが，種組成に重点をおいた植物社会学的な研究はごく最近であって，さらに人類の生活領域の中の「みどり」として社叢をとらえ，環境保全の面から研究が行われはじめたのもほぼ同時期の昭和46,7年のことである。植物社会学的な研究結果は滋賀県（菅沼，1972），環境保全調査を加えた結果は，緑地研究会から奈良県，大阪府，和歌山県（1974），京都府（1977），兵庫県（未刊）各地域のものが刊行されている。詳細はそれぞれをご覧いただくことにして，ここではこれらの府県単位の調査によって明らかにされた，知られなかった部分を紹介することにしたい。

滋賀県の場合

—滋賀県の自然保護に関する調査報告（1972）より—

一言にいうと，植生が多様なことである。巨大な水面をもつ琵琶湖が気象条件を緩和していることが最大原因と考えられる。そうして最大の発見はタブ林の分布である。北湖の湖西から湖北にかけて，北または西に山塊を背負うような地点，すなわち湖中の竹生島，湖北の宇賀神社と須賀神社，湖西近江舞子の南，八所神社のいずれも社寺に関係のある森林に，滋賀県植物誌にも天然記念物緊急調査植生図・主要動植物地図滋賀県（1972）にも一行もふれられていないタブ林を発見したことである。組成的には能登半島および房総半島以北東北地方南部までの海岸に分布しているタブ—イノデ群集と同定できる林分である。

竹生島ではタブ林の林床にチマキザサが草高２m程度で密生しており，暖地の沿岸に生育するタブと最高積雪深50cm以上の地に生育分布するチマキザサが群落を形成していることと，島の南面にはコジイが多いことである。これらは冬季の最低気温と，夏季の乾燥度で説明がつくが，それにしても美事な森林である。

ほかに，スダジイ林，コジイ林，シラカシ林，アラカシ林，ツクバネガシ林が認められたが，海が無い県で，海岸をもつ地域と同じように多様性に富んだ森林群落をもつことが判明したわけである。

奈良県の場合

—森林第１号，社寺林の研究・奈良県（1974）より—

奈良県には森林が天然記念物に指定されている例は他府県に比べて多いが，低平地では春日山原始林（奈良市・特別天然記念物），春日神社竹柏（ナギ）樹林（奈良市），与喜山天神山暖帯林（桜井市），妹山樹叢（吉野町）がある。このうちナギ樹林を除いては，その主体はコジイ林であって，奈良県の低平地の極相はシイ林（コジイ林）とされていた。

ところが，県内の低平地を調査して得た結果は，コジイ林の他にイチイガシ林があることで，春日大社の境内地，手向山山麓などにイチイガシの巨樹があることはかつてのイチイガシ林の存在を裏付けるものであるということになった。このイチイガシ林は奈良盆地に１カ所のみであったが，イチイガシ林の存在したことを裏付ける資料は上記の他に明日香村に数件，吉野町に１件発見された。

イチイガシ林あるいはイチイガシを含む林分は沖積地で，深層適湿土壌の地に見られ，コジイ林が傾斜地で浅層やや乾燥の土壌，主として花崗岩を母岩とする丘陵地に多く見られるのと対照的である。

極相であるこれらのイチイガシ林及びコジイ林は，極相の状態で保たれている場合も確かに多いが，極相に至る遷移系列の一歩手前にある場合も多い。この遷移段階に相当する森林はイチイガシ林，コジイ林の如何にかかわらず相観的にはアラカシ林であるが，種組成的にははっきりと２種類のアラカシ林に分けられることが判った。すなわち，イチイガシ林系列とコジイ林系列で，前者に入るアラカシ林はアラカシ—クロガネモチ群落であり，後者に入るアラカシ林はアラカシ—ソヨゴ群落である。

イチイガシ林系列
- イチイガシ林（極相）
- アラカシ—クロガネモチ群落にイチイガシを伴う林分
- アラカシ—クロガネモチ群落
  - 群落区分種：クロガネモチ，エノキ，ムクノキ，サネカズラ，キヅタ

コジイ林系列
- コジイ林（極相）
- アラカシ—ソヨゴ群落にコジイを伴う林分
- アラカシ—ソヨゴ群落
  - 群落区分種：ソヨゴ，ネジキ，モチツツジ，タカノツメ，シシガシラ

いま，アラカシ—クロガネモチ群落の区分種をクロガネモチグループ，アラカシ—ソヨゴ群落の区分種をソヨゴグループとすると，クロガネモチグループには果実を鳥が好んで食べる液果が多く，ソヨゴグループには少ないだけではなく，アラカシ林のさらに一段階前の遷移段階であるアカマツ林の遺存種ともいえる。

以上のように森林群落の種組成面での明らかな違いが見出されるわけであるが，典型群落（イチイガシやコジイを伴わない林分）では，両群落とも最上層の優占種，すなわち相観を左右する種はアラカシである。アラカシは適応する環境条件の幅が広い樹種とされている（山中，1966）が，潜在的な形質を現在見られるような状態におきかえたのは，人類の文化活動がその原因ではないかと考える。

少なくとも今を去る3000年の昔に，われわれの祖先は生活環境の整備，すなわち林地の開拓と有用材の伐採を始めたわけであるが，奈良盆地とその周辺を例にとっただけでも，平城京を造営した710年には既に周辺から，平城宮を建設するためのヒノキ材を得ることは困難であって伊賀（三重県の北部）と近江（滋賀県）から運び込んだという。現在ではヒノキの天然生が見られるところは極めて少ないが，当時は比較的容易に，低平地に見られたのであろう。

こうした皆伐あるいは間伐は次第に原始林の生育範囲をちぢめ，さらに隔離が進み，神社そのものの変遷に伴って森林の内部崩壊も手伝って古くには存在したかも知れない生活力の弱い木本種や草本種に代って，アラカシのような適応力の大きい種がとって代るようになったのではないかと考えている（菅沼・若林，1974）。

イチイガシ林の存在そのものは，近畿地方では伊勢神宮で知られていたし，九州では大分，宮崎，熊本，長崎の諸県でも学界ではよく知られていた。しかし，北上するに従ってイチイガシ林の分布地は比較的温暖な沿岸地帯に限られるようになり，奈良県のような内陸地にはイチイガシ林はあっても北限地を越えていて個体が分布するていどで，森林は望めないと考えられていた。それだけに今回の調査に伴う発見は意義深いことといえる。

大阪府の場合

—森林第1号，社寺林の研究・大阪府（1974）より—

大阪平野を中心とする周辺の山麓をふくめての調査の結果は，豊原（1974）によると，洪積台地では圧倒的にコジイ林が多く，他にシリブカガシ林，アカマツ林が，沖積低地ではアラカシ林，クスノキ林が4カ所ずつ，他にムクノキ・エノキ林，クロガネモチ林，モチノキ林，サカキ林が，さらに海岸崖地にウバメガシ林が存在することを報告している。

大阪府は瀬戸内式気候の影響を受けるが，それに人為的な攪乱が相まって，複雑な森林植生を形成するが，人為的攪乱の大きい沖積低地では二次遷移がいびつな形に発展していることを知ることができる。ただ，沖積低地の地下水に恵まれたところでは，かなり湿性の強いタイプの森林が発達し得るので，すべてがコジイ林に収斂するとは限らないだろう。

また，洪積台地でシリブカガシ林が記録されたことは特筆に価する。

和歌山県の場合

—森林第1号，社寺林の研究・和歌山県（1974）より—

那智大社の社有林に見られるように広大な面積に多様な森林群落が発達している例を除くと，ほとんどは黒潮の影響下におかれる1または2の林分から構成される場合が多い。真砂（1974）はこれらの森林を，

1. ウバメガシ林系列
2. タブ林系列
3. イチイガシ林系列
4. スダジイ林系列
5. コジイ林系列
6. ウラジロガシ林系列

にまとめている。このうち他府県に見られないタイプに，タブ—ホソバカナワラビ群落，カゴノキ群落，イヌマキ—ホソバカナワラビ群落，ホルトノキ群落（以上タブ林系列），スダジイ—タイミンタチバナ群落，スダジイ—ホソバカナワラビ群落，スダジイ—イスノキ群落（以上スダジイ林系列），ウバメガシ群落，ウバメガシ—タイミンタチバナ群落（以上ウバメガシ林系列）があげられるが，本年度に実施される三重県の資料を併せて，さらに研究の進展が望まれる。

京都府の場合

—森林第7号，社寺林の研究・京都府（1977）より—

全国的に見ても天然記念物の指定物件の少ない自治体

であるが，ほんとうに無いのかといえば決してそうではない。人文文化財以外の文化財は文化財に非ずという風潮が強いためかも知れない。

京都府における調査は意識的に開発の矢面に立つ社寺林と，さらに，学術的，教育的，風致的に価値が高い社寺林に焦点をあてたので，これがすべてではないが，コジイ林，スダジイ林，イチイガシ林，シラカシ林，アラカシ林，ムクノキ—エノキ林，ナナメノキ林，クロガネモチ—ヤブニッケイ林にまとめることができた（菅沼，1977）。

ここでは，奈良県の項で述べたイチイガシ林が，由良川（中流域）流域の河岸段丘上から発見され，イチイガシ林の北限地帯が浮きぼりにされたわけである。もちろん沖積地であるが，断片的であるので，さらに広い範囲の調査を行う必要があるが，往時，イチイガシ林はかなり広く分布していたと考えて差支えなさそうである。

森林の保存を脅かす要因

社寺林の学術的な重要性は以上の点から充分理解していただけたと思うが，これらの森林は社寺の経済的な事情から，保存ないし保護という点で危機にさらされていることが多い。

今，奈良，大阪，和歌山，京都の4府県について見ると，自然要因では，風害によるいたみが最も多く，次いで虫害，老衰があげられる。人為要因は多彩であって先ず，人の立入りが最も多く，次いで植栽であるが，伐採，道路の建設または道路の拡幅，施設建造も多い。中には公共施設への身売りが何件かあるのは誠に痛ましいことである。

4府県に通じていえることは，天然記念物級ではないが，学術的にも教育的にも，また地域住民の生活にも重要な森林にはきびしい規制を設け，指定物件をも含めて国又は自治体が補助金を出して所有者が森林を保護，管理することを義務づける必要があろう。

本年度の調査

奈良県，大阪府，和歌山県については，緑地研究会で調査されてから既に5年経過しているので，森林第1号に印刷された代表的な社寺林について追跡調査を行うことにしたい。特に前回の調査後の変化について8項目にわたって調査し，前回行わなかった神木調査とカイガラムシの着生状態を追加する。

三重県については，緑地研究会の調査が本年度に行われるので，その結果を借用する。滋賀県については，既に植生調査は行われているが，他府県と揃った資料がないので，代表的社寺林について三重県と同様の項目を調査する。

兵庫県については，緑地研究会で行った調査がごく最近のことであるので，今年度は行わない。京都府についても同様であるが，社寺林の破壊度指標植物といったものを，京都市及びその近郊で模索することにしたい。

なお，緑地研究会（代表者四手井綱英氏）は，財団法人土井林学振興会の協力を得て，社寺林の調査を全国的に実施し，その成果を森林誌に逐次発表している（現在，第8号を刊行準備中である）。（1978年9月20日）

主要参考文献

1)文化庁(編)：天然記念物緊急調査植生図・主要動植物地図25．滋賀県（1972）

2)八賀　晋：ひろがる耕地．坪井清足編日本生活文化史1．日本的生活の母胎．pp.260．河出書房新社（1975）

3)北村四郎(編)：滋賀県植物誌．pp.362．保育社（1968）

4)真砂久哉：社寺林の研究・和歌山県．森林1：119—170（1974）

5)菅沼孝之：滋賀県のヤブツバキ・クラス域極盛相植生．滋賀県の自然保護に関する調査報告，23—36.（1972）

6)————：社寺林の研究・京都府．森林7：75—128.（1977）

7)————・若林陽子：社寺林の研究・奈良県．森林1：13—66（1974）

8)————・————：奈良盆地およびその周辺の神社林の研究から—イチイガシ林とアラカシ林について—．林業技術，389：6—9（1974）

9)豊原　稔：社寺林の研究・大阪府，森林1：67—118（1974）

10)山中二男：アラカシ—ナンテン群集について．高知大学術研究報告，15：1—9（1966）